

引かずにはいられない



真野 泰

世の中に絶えて字引きのなかりせば何物もてか命継がまし。辞書がなかったら飯の食い上げであり、日々の無聊を慰める有力な手段まで1つ失うことになる。日ごと、感謝を胸に引きまくり、引くほどに感謝の念は深まってゆく。なにしろ、こんなことまで辞書は教えてくれるのだから。

北部人は“be made up”

今年5月、カンヌ映画祭において英国のKen Loach監督が*I, Daniel Blake*でパルム・ドールを受賞した。この映画は与党保守党が推し進める緊縮財政の中で後退する福祉の現状を批判的に描いた作品とのこと。福祉の切り詰めに反対する野党労働党の議員たちも、ケン・ローチ監督の受賞に賞賛のことはを送ったという。そんな労働党議員の1人アンジェラ・レイナーについて、BBCは“Angela Rayner MP said she was ‘absolutely made up’ for the director”と伝えている。

そこで、この“be made up”を調べることになる。『ジーニアス英和辞典』（第5版、G5）のmadeの項にちゃんと出ていて、「〔略式〕とても喜んで、満足して」とある。でも、これだけでは、なぜ“absolutely made up”の箇所がわざわざ引用されているのか釈然としない。『ジーニアス英和大辞典』ではmakeの項に見つかつて、使用域ラベルには《北イング略式》とある。『リーダーズ英和辞典』（第3版）なら、makeの項、make upの第11義がそれ。こちらの使用域ラベルには《北イング・アイル 口》とある。

なるほど、アンジェラ・レイナーはイン格蘭

ド北西部のGreater Manchesterの出身。下院議員としても、その選挙区の1つから選出されている。ケン・ローチの受賞作*I, Daniel Blake*も舞台はイングランド北東部のNewcastleらしいから、ひょっとすると「とても喜んで」の意の“be made up”が映画にも出てくるのかも。

さて、『ジーニアス英和辞典』（第5版）のbe made upにしろ、『リーダーズ英和辞典』（第3版）のmake upの第11義にしろ、各辞典の前の版には出ていない。日進月歩とはこのことであろう。着実な改訂作業に頭が下がる。

よく使う英英辞典では、*Oxford Dictionary of English (ODE)* が“N. English & Irish” “informal” というラベルを付け、“be delighted” という語義と、“we’re made up about the baby.” という例文を与えている。*Longman Dictionary of Contemporary English (LDOCE)* の例文は“When I heard she was pregnant, I was really made up for her.”で、ラベルは“spoken informal”のみ。*Oxford Advanced Learner’s Dictionary (OALD)* に、この言い回しは見つからない。

ぼくは“only as horrid”

いや、*OALD* を悪し様に言うつもりはない。No dictionary is perfect. というだけのことだ。こちらは多くの辞書を引きまくるまで。

英国の作家Ian McEwanの*The Daydreamer* (1994年刊) を訳したときのことだ。主人公のPeterには3つ違いの妹Kateがいるけれど、“He [= Peter] was only as horrid to his sister as

she was to him.”である。この horrid は、G5にある「《やや古》[…に] ひどく不親切な [to]」に違いないが、この《やや古》が気になる。いささか古めかしいということばがなぜここに使われるのか。LDOCE も、まず horrid という語そのものを “especially BrE” としたうえで、第2義 “behaving in a nasty unkind way” に “old-fashioned” のラベルを付す。ODE は、“informal” とするのみ。このときいちばん有り難かったのが OALD である。ラベルは “old-fashioned or informal, especially BrE” で、語義は “very unpleasant or unkind” だから、他の辞書と大差なさそうだが、“a horrid child” と “Don’t be so horrid to your brother.” という例文が載っていた。

これを見て、急にわかった。ああ、horrid はピーター自身のことばというよりも、きつとお母さんのことばなのだ。いつも「妹に意地悪するんじゃないありません」と言われていて、そのたびに「だって、ケイトも意地悪するよ。お互い様だよ」と抗弁しているに違いない。さらに妄想をたくましくすれば、作者イアン・マキューアン自身、子ども時代にお母さんから言われたんじゃないだろうか—— “Don’t be so horrid!” と。もっとも、マキューアンは一人っ子として育てられたので、“to your sister / brother” の部分は、なし。

最後は OED, でも SOED も

このように実際の役に立ってくれるばかりではない。辞書には語源を知り、語義の変遷を知るという楽しみもある。その観点からは、というよりその観点からも、語義を古い順に並べた *Oxford English Dictionary* (OED) は unsurpassable な存在である。

無論、語義を現代における使用頻度の順に並べた一般の英和辞典や英英辞典からも、簡単な語源情報は得られる。G5で guy を引けば、【Guy Fawkes の名より】と語源を教えてくれる。けれ

ど、もともと固有名詞だった guy の意味がどのように変遷して現在の「男、男性、やつ」に至ったのかを知るには OED に当たるほかない。

また、G5で check を引けば、【原義：王→チェスの「王手」→阻止→照合】と語義の変遷の概略を教えてくれる。さらに『ジーニアス英和大辞典』や研究社の『新英和大辞典』などを引けば、もとを尋ねればペルシア語の šāh (王) に行き着くこと、英語に入ってきたのが14世紀初めであることもわかる。けれども、OED を見れば、英語としては「王手！」という間投詞として使われたのが最初であることまでわかる。いつごろから「阻止」の意で使われ、いつごろから「照合」の意で使われるようになったのかも、わかる。なんと、「照合」(名詞)の意の初出引用例文(1786年)は、かのエドモンド・パークではないか！こんなことを知ると、ほくほくする。

OED の簡約版である *Shorter Oxford English Dictionary* (SOED) も無視できない。語義も引用例文もぐっと減らしながら、語義を古い順に並べて各語義の初出時期を詳らかにする “historical principles” を守っている。

OED の最新版が1989年刊行の第2版であるのに対し、SOED の最新版は2007年刊行の第6版であることも魅力だし、OED に比べればコンパクトなので、iPhone / iPad 用アプリがある。

何より引用例文の取捨に妙を得ている。例えば horrid なら、OED に20世紀の例文は1つもない。SOED は、もとの OED にあった17世紀の大詩人 Dryden と18世紀の大詩人 Pope からの例文だけ残し、20世紀の作家 P. G. Wodehouse と Rebecca West からの例文を持ってきた。前者は “You’ve grown a beard, and it looks perfectly horrid.” だし、後者は “There have been a lot of horrid little boys since the world began.” だ。コンテキスト抜きでも読めば頬のゆるむ、こっちも使ってみたくなるような英語ではないか。

(まの やすし・学習院大学教授)